

令和 5 年 5 月 8 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02397

研究課題名(和文) 戦後関西における子どもと教師の学びの循環 西田秀雄による絵日記指導を中心に

研究課題名(英文) Cycle of Learning for Children and Teachers in Postwar Kansai: Picture diary guided by Hideo Nishida

研究代表者

勅使河原 君江 (TESHIGAWARA, Kimie)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：60298247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小学校教諭であった西田秀雄(1913-1992)が実践した絵日記指導について1.西田が1950年代に実践した絵日記指導資料の収集とアーカイブ化。2.絵日記資料中に残された西田の赤ペン指導の内容に焦点をあてた検討。3.絵日記が作成されたのと同時期に発行されていた童詩雑誌『きりん』に掲載された西田が指導した児童作品の調査。4.西田の絵日記指導と『きりん』掲載作品との関係性の検討に取り組んだ。これらの研究を通して、絵日記という媒体を通した子どもと教師の学びの循環という実践の構造を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、西田による絵日記という媒体を通した西田の赤ペン指導によって子どもと教師が対話的にやりとりしながら子どもの表現力を養う学びの循環を構成していたことが明らかになった。また、絵日記指導によって子どもたちの表現力が養われ、数多くの絵や詩、綴り方の制作が行われ、それらの成果物が童詩雑誌『きりん』に数多く掲載されたことから本誌は出版物として広く子どもたちの表現作品を周知するという役割とともに当時の子どもたちの表現力を涵養する場としての役割も担っていたことがわかった。これら子どもと教師の対話的な学びの実践は現代における主体的で対話的な深い学びを目指す実践資料ともなりうるといえよう。

研究成果の概要(英文)：This study investigated picture diary instruction as practiced by Hideo Nishida (1913-1992), an elementary school teacher. 1. Collection and archiving of materials on picture diary instruction practiced in the 1950s. 2. Examination focused on the content of Nishida's red pen instruction. 3. A children's work that Nishida taught was published in "Kirin". "Kirin" was a children's poetry and picture magazine published at the same time as Picture Diary. 4. Relationship between picture diaries and works published in "Kirin". The results showed the children's picture diaries that Nishida guided in a cycle of learning between children and teachers.

研究分野：美術・造形教育

キーワード：西田秀雄 絵日記指導 童詩雑誌『きりん』 学びの循環 美術・造形教育 赤ペン指導

1．研究開始当初の背景

本研究で取りあげる絵日記指導に取り組んだ西田秀雄（1913-1992）は、第二次世界大戦中から戦後にかけて京都市で小学校教師として勤務しつつ自身も油絵を制作し続けており、さらに1952年に京都大学で研修を受けるなど美術・造形教育研究にも取り組み、数多くの美術・造形教育に関する著書を残している。これまで勅使河原が行った西田の著書に関する研究において、西田が教師、画家、美術教育研究者という視点を持って教育実践を行っていたことを明らかにした（勅使河原 2012）。また、西田の著書を読み解くことで、西田は第二次世界大戦中から子どもの美術教育の実践と研究に取り組み、子どもの経験や観察する体験を通した美術鑑賞や作品制作活動を大切にしていたことがわかった（勅使河原 2017）。これら西田研究と共に勅使河原はこれまで1948年から1962年まで関西地方で発行されていた童詩雑誌『きりん』とその発行に携わった美術作家との研究も行なっており（勅使河原 1997）、『きりん』にも西田が指導した子どもの詩や絵が数多く掲載されていることも明らかにした（浮田ら2008）。これら西田秀雄研究と『きりん』の研究を行う中で、1950年代に西田が指導した子どもが小学4年生から6年生の時期に作成した9冊の絵日記が現存していることが確認された。しかし、それらの資料の調査と研究は未着手であり、本研究では、これら絵日記資料の収集とアーカイブ化と絵日記の内容分析に取り組み、西田研究の推進を図りたいというのが本研究の着想に至った背景である。

2．研究の目的

本研究で取り上げる1950年代に描かれた絵日記資料は約70年の時間を経ており劣化が進んでいるため、早急にそれらの資料のデジタルアーカイブ化を行い、データの整理を行う必要がある。これらの資料の内容を検討し、西田の絵日記指導による子どもの学びについて日記の紙面から検討を行う。そして、勅使河原がこれまで行ってきた西田秀雄研究と童詩雑誌『きりん』に掲載されていた西田の指導による子どもの作品を照合し、絵日記資料と『きりん』に掲載された作品との関係性を解明することを目的とした。

3．研究の方法

（1）約70年前に描かれた絵日記資料のアーカイブ化と整理を行う。

（2）絵日記に綴られている子どもの日々の生活を表現した絵と文章に対して、担任教諭であった西田がページごとに赤ペン指導を行っている記述文に着目して、当時、西田が取り組んだ絵日記指導の内容や指導方針を分析し、子どもと教師の絵日記を通した交流の中から生まれた教育的意義を検討した。

（3）絵日記が描かれた時期と同時期に関西地方で発行されていた子どものための詩や絵、綴り方を掲載した童詩雑誌『きりん』の教育的意義について捉え直しを行う。

（4）絵日記の内容を検討すると共に、童詩雑誌『きりん』に掲載されている西田が指導した児童の詩や絵や西田の教育活動に関する記事などにも着目し、それらの資料との照合を行い、絵日記指導と『きりん』に掲載された絵や記事との関係性の検討を行う。

4．研究成果

（1）本研究で西田が指導した子どもの絵日記 9 冊の全ページをデジタル化してアーカイブ化することができた。

(2) アーカイブ化した絵日記は、1949(昭和24)年から1951(昭和26)年ごろに西田のクラスに所属していた子どもが小学4年生から6年生時に描いた絵日記資料であった。その紙面には、毎日の生活を綴った絵や文章と共に担任教諭であった西田が赤ペンで入れた修正やコメントがページごとに記入されていた。それら絵日記には、絵日記を書いた子どもと西田が日々の生活の中で見出した美的価値観をやりとりする姿が生き生きと残っていた。時には絵日記の絵の描き方を具体的に指導する赤ペン指導があったり、子どもが美しく描くために心がけた事を絵日記に記した文章について西田自身が考える絵を描く際の心のありようや、創造性について赤ペンで記載しているのがあった。また、絵日記の内容から同時期に西田が教えていた京都市の小学校では、毎日、朝のクロッキー教室が行われていたことがわかった。この会は児童によって自主的に運営され、児童が自由に参加していた。絵日記が描かれた時期と同時期に関西地方で発行されていた子どものための詩や絵、綴り方の童詩雑誌『きりん』にも西田の指導によるクロッキー教室の記事が掲載されており、このクロッキー教室で絵日記を作成していた子どもが描いたクロッキーの作品が『きりん』1951年8号にも掲載されていることが判明した。この子どものクロッキーの作品に対して、西田のコメントは「S(筆者修正)は、これで3年間ぐらい、学校でやっている朝のクロッキー会にやすむことなしにできています。かおでもいきいきかかっていますね。(中略)えんぴつの線にもそのようなしんけんさがこもっています。このクロッキー一枚かく時間は4分間です。さあ、このクロッキーは六百枚か七百枚ぐらいでしょうか」と記載されており、西田は絵日記を描いていた子どもが毎日クロッキー教室にも通っていた姿と共にクロッキー作品の良さを評している。以上のように絵日記を描いていた子どもは毎日欠かさず学校のクロッキー教室で描きつづけるとともに絵日記という媒体を通して西田の赤ペン指導によって日々の生活を表現するという生活を送っていたことがわかった。これらの内容は第45回美術科教育学会兵庫大会(2023年3月27日)において「西田秀雄による絵日記指導とクロッキー教室指導の実践 -昭和20年代の京都市小学校における資料に着目して-」というテーマで研究発表を行った。

(3) 童詩雑誌『きりん』の調査を行い、4巻7号(1951年7月)に「竹中郁先生のおはなしをきく」という記事で西田が勤務する京都市小学校に『きりん』の編集者であった詩人の竹中郁が訪問した際の様子が記事として掲載されていることが判明した。この記事は、竹中が訪問した時の様子を訪問した西田のクラスの児童が日記形式で記述しているものであった。この日記の冒頭は、竹中が西田先生と一緒に教室に向かって来る様子を竹中の足音を描写するところから始まっており、初めて会う竹中の姿を想像し、廊下のガラス越しに竹中の影を見つけ、教室にある机や本箱も子どもたちと一緒に竹中に会うのを楽しみにしているという比喩表現を用いて日記を描いた児童の期待感を臨場感溢れる表現で表している。また、本研究で取り上げている絵日記の作者である子どもが描いた竹中郁のクロッキー画も同ページに掲載されていた。そして西田の教育実践では、子どもたちと詩人と出会う体験が取り入れられており、子どもたちも同時代に活躍する芸術家との出会いを鋭敏に感じ取っていたのであった。

このように西田が小学校教育に取り入れていた『きりん』の編集や執筆には、後に文学界や美術界で活躍する当時はまだ若手であった作家や画家たちが数多く関わっていた。詩や綴り方の指導には、作家の井上靖や詩人の竹中郁、当時は小学校教諭であり後に作家となる灰谷健次郎。美術の指導には、神戸で女性像を描き続けた具象画家・小磯良平(1903-1988)や1950年代から1979年代に関西地方で活動していた前衛美術団体「具体美術協会」の作家たちが子どもたちの美術・造形指導にあたっていた。このように、『きりん』には自らも表現者でありつつ子

どもの教育に関わった人物達たちの関わりを通して、子ども達と詩や綴り方、美術表現の本質に迫る試みがされており、その成果として『きりん』に結実しているのであった。このことから子どもの表現教育において、表現のプロフェッショナル（画家、詩人、作家など）が関わることの意義が示された。この内容に関しては、神戸市立小磯記念美術館開館30年特別展図録『竹中郁と小磯良平 詩人と画家の回想録』（2022年10月）「竹中郁と童詩雑誌『きりん』」において執筆掲載した。

（４）『きりん』には、西田の絵日記指導によって子どもたちに養われた表現力を用いて描かれた絵や詩が成果物として掲載されていた。これらのことから、子どもたちの詩や絵、綴り方を数多く掲載していた童詩雑誌『きりん』は、出版物として広く子どもたちの表現作品を周知するという役割があったとともに、当時の子どもたちの表現力を涵養する場としての役割も担っていたことがわかった。これらの内容は第61回大学美術教育学会宮崎大会（2022年9月18日）において「童詩雑誌『きりん』が目指した感性教育 -1951（昭和26）年7月号掲載記事より-」というテーマで研究発表を行った。

以上のことから、西田は絵日記という媒体を通して教師と子どもが対話的にやりとりしながら学びの循環を行うとともにそこで養われた表現力で描かれた絵や詩をその子どもの成果として童詩雑誌『きりん』に掲載するという学びの循環を構成していたことが明らかになった。

最後に本研究に約 70 年前の絵日記資料を提供してくださった西田の元教え子の方に深く感謝申し上げたい。

今後の展望としては、絵日記の作者からご提供いただいた膨大な絵日記資料内容の整理と内容から読み取れる西田の赤ペン指導内容の精緻な検討を進めていきたい。

参考文献

- ・ 勅使河原君江（2012）「西田秀雄著『児童画指導の技術』資料研究 小学校教諭・画家・美術教育研究者の視点による教育実践」神戸大学発達科学部『教育科学論集』第15号 pp.9-15
- ・ 勅使河原君江（2017）「西田秀雄の美術鑑賞教育 西田秀雄著『日本美術と児童画』より」日本美術教育学会『美術教育』301号 pp.40-48
- ・ 勅使河原君江（2013）「西田秀雄著『日本美術と児童画』資料研究 第二次世界大戦下の美術鑑賞教育実践に注目して」神戸大学発達科学部『教育科学論集』第16号 pp.1-11
- ・ 勅使河原君江（1997）「美術作家と美術教育活動の相互関係に関する一考察 「具体美術協会」の作家と童詩雑誌『きりん』を中心に」東京藝術大学美術教育研究会『美術教育研究』第2号 pp.13-26
- ・ 浮田要三・加藤瑞穂・倉科勇三・勅使河原君江（2008）『「きりん」の絵本』ポーラ美術振興財団
- ・ 山本淳夫.他著（2000）『美育-創造と継承-』芦屋市立美術博物館
- ・ 西田秀雄（1951）「わたしのすきな絵」日本童詩研究会『童詩雑誌「きりん」』4巻8号 pp.32-33
- ・ 大谷美栄子（1951）「竹中郁先生のおはなしをきく」日本童詩研究会『童詩雑誌「きりん」』4巻7号 pp.20-22

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 勅使河原君江
2. 発表標題 西田秀雄による絵日記指導とクロッキー教室指導の実践 -昭和20年代の京都市小学校における資料に着目して-
3. 学会等名 第45回美術科教育学会兵庫大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 勅使河原君江
2. 発表標題 童詩雑誌『きりん』が目指した感性教育 -1951（昭和26）年7月号掲載記事より-
3. 学会等名 第61回大学美術教育学会宮崎大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 勅使河原君江
2. 発表標題 表現につながる鑑賞の取り組みについて
3. 学会等名 尼崎市造形教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 勅使河原君江
2. 発表標題 対話型美術鑑賞入門
3. 学会等名 伊丹市民のための対話型美術鑑賞を学ぶ会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 勅使河原君江, 大橋毅彦, 岡泰正, 廣田生馬, 多田羅珠希	4. 発行年 2022年
2. 出版社 神戸市立小磯記念美術館	5. 総ページ数 152
3. 書名 神戸市立小磯記念美術館 開館30年特別展図録「竹中郁と小磯良平 詩人と画家の回想録」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国立国際美術館HPアクティビティ・パレット25 「50個の「・」から絵をかこう」 https://www.nmao.go.jp/archive/activity_page/teshigawara.html 国立国際美術館HP見るプラス 「すべての未知の世界へ-GUTAI-分化と統合」展関連企画 「50個の「・」から絵をかこう」ワークショップ https://www.nmao.go.jp/activity_report/repo_miru1120/
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------